

Subject : **Japanese**Production of Courseware
e-Content for Post Graduate CoursesPaper No. 02 : **日本語学 (Japanese Linguistics)**Module 13 : **アスペクトとテンス (Aspect and Tense)****Development Team****Principal Investigator:****Prof. Anita Khanna**

Jawaharlal Nehru University, New Delhi

Paper Coordinator:**Prof. Prashant Pardeshi**

The National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL)

Content Writer:**Prof. Kazuyuki Kiryu**

Mimasaka University

Content Reviewer:**Prof. Hideki Kishimoto**


Kobe University

Japanese

Japanese Linguistics

アスペクトとテンス (Aspect and Tense)

Description of Module	
Subject Name	Japanese
Paper Name	日本語学 (Japanese Linguistics)
Module Title	アスペクトとテンス (Aspect and Tense)
Module ID	JPN-P02-M13
Quadrant 1	E-Text

ePathshala
पाठशाला
A Gateway to All Post Graduate Courses

Japanese

Japanese Linguistics

アスペクトとテンス (Aspect and Tense)

アスペクトとテンス

もくてき にほんご かん ひょうげん い み ようほう
目的：このモジュールでは、日本語の**アスペクト**と**テンス**に関する**表現**の意味・用法
 かいせつ りかい ふか もくてき
 を解説し、理解を深めることを目的とする。

1. アスペクトとテンスの概要

にほんご できごと じょうたい じかん かんけい あらわ ぶんぼう
 日本語では、ある出来事や状態が時間とどのように関係するかを表す**文法カテ**
 りとして、アスペクトとテンスが認められ、述語にその**区別**が現れる。アスペクトと
 みと じゅつご くべつ あらわ
 は、動きを時間の流れの中でまとめた**1**つの**事態**としてみたり、その動きの展開の
 うご じかん なが なか じたい うご てんかい
 一部に**着目**して捉えたりする**文法カテゴリー**である。また、テンスは、発話時などを
 いちぶ ちゃくもく とら ぶんぼう はつわ じ
 基準点としてある**事態**が**時間軸**上のどの位置にあるかを示す**文法カテゴリー**である。
 きじゅんてん じたい じかんじくじょう いち しめ ぶんぼう

にほんご きほんてき けいしき たいりつ れい と い か
 日本語の**アスペクト**と**テンス**の**基本的な形式**の対立は、「する」を例にとると以下
 あらわ けい ほじょどうし むす けいせい
 のように現れる。テイル形は、**補助動詞**「いる」と結びついて形成される。

アスペクト テンス	かんせいそう 完成相	けいぞくそう 継続相 テイル形
けい ひかこけい ル形 (非過去形)	する	している
けい かこけい タ形 (過去形)	した	していた

2. アスペクトと動詞の種類

動詞には、「ある」「いる」のような状態を表すもの（状態動詞）と、「走る」「壊れる」のような動きを表すもの（動作動詞）がある。動作動詞が表す、動きのある事態は、始まり、途中、終わり、という「事態の展開の各段階」（フェーズと呼ぶことにする）に通常分解することができる。

2.1 状態動詞

状態動詞は、時間的な流れの中で事態の変化がないため、アスペクトの意味的な対立をもたない。そのため、状態動詞は、(1.) の「ある」のように基本的にテイル形のようなアスペクトの形式は取らないか、(2.) の「違う」のようにテイル形を取ってもアスペクト的な意味の差がないか、のどちらかになる。

(1.) 机の上に本がある・*あっている。

(2.) 答えが違う・*違っている。（違う＝違っている）

(*のマークは非文法的であることを示す。)

2.2 動作動詞のル形とテイル形

動作動詞には、「書く」のように一定の時間を持って動きが展開し、フェーズが具体的に認知できる動詞と、「死ぬ」のように時間の幅を持たず、フェーズに分解できない動詞がある。前者を**継続動詞**、後者を**瞬間動詞**と呼ぶ。(3.)のように継続動詞がテイル形につくと動作の継続を表す。

(3.) 太郎は今手紙を書いている。

日本語では、動作動詞のル形が**動作継続**を表すことはできない。ル形は通常未来の出来事を表すか習慣を表す。(4.)の「今」は、**発話時点**ではなく、発話時点より後の時間を指している。

(4.) 太郎は(今・毎日)手紙を一通書きます。

「死ぬ」のような**瞬間動詞**は、開始点やその途中などのフェーズを認めることができない。そのため、(5.)のように、テイル形がつくと動作の継続ではなく、その変化が起こった後の**結果状態**を表す。

(5.) その魚さかなは死しんでいる。

動詞のテイル形が「動作継続」の意味になるのか「結果状態」の意味になるのかは、
 「継続」けいぞく 「瞬間」しゅんかん という事態展開の長さだけでは説明できない。例えば、(6.) の「叩たたく」
 は、1回の瞬間的な動作を指すが、(7.) の「叩たたいている」のようにテイル形になる
 と結果状態ではなく「動作の反復・継続」を表すと解釈される。「叩く」のような
 瞬間動詞を「一回動詞」と呼ぶ。

(6.) 男おとこの子こが犬いぬを棒ぼうでバシたッと叩かいいた。(1回)

(7.) 男おとこの子こが犬いぬを棒ぼうでバシバシた叩たたいている。(反復)

また、「開ひらく」「消きえる」などの瞬間動詞は、状況によってはフェーズを認める
 ことができ、「ゆっくりと」のような時間的幅を意味する言葉と共起可能で、その場合
 「変化の過程の継続」を表すことも可能である。

(8.) 水門すいもんがゆっくりと開ひらいている。

(9.) ろうそくきがゆっくりと消きえている。

どうし なか ぶん じゅつぷ いち かんせいそう かたち つか つね けい もち
 動詞の中には、文の述部の位置では完成相の形で使われず、常にテイル形で用い

られる動詞がある。このような動詞は「ばかげる」「そびえる」などの動詞で、テイル
 けい しゅご ぞくせい せいしつ あらわ
 形になることで主語の属性や性質を表す。

ばなし
 (10.) こんな話**は**ばかげている。(＊ばかげる)

くも うえ やま
 (11.) 雲の上**に**ヒマラヤの山が**そ**びえている。(＊そびえる)

2.3 テイル形のその他の意味

どうし けい どうさけいぞく けっかじょうたい はんぶくどうさ けいぞく いみ
 動詞のテイル形が「動作継続」「結果状態」「反復動作の継続」のどの意味になる
 どうし いみてき せいしつ かんけい くわ けい どうし
 のかは、動詞そのものの意味的な性質が関係する。それに加えて、テイル形には、動詞
 せいしつ かんけい あらわ いみ ふくすうかい じたい しゅうかん けいれき けいけん
 の性質とは関係なく表せる意味として「複数回の事態」「習慣」「経歴・経験」とい
 ったものがある。

さいきん がいこくじん にほん りょこう き ふくすうかい じたい
 (12.) 最近**は**、たくさんの外国人が日本に旅行で来ている。(複数回の事態)

じろう がっこう かよ しゅうかん
 (13.) 次郎**は**バスで学校に通っている。(習慣)

やまもと いちど おとず けいれき けいけん
 (14.) 山本**さん**は、一度プネーを訪れている。(経歴・経験)

「^{けいれき}経歴・^{けいけん}経験」のように、^か過去に^こ起こったことが^お現在の^{げんざい}話題と^{わだい}何らかの^{なん}関係がある^{かんけい}ことを表^{あらわ}す用法は^{ようほう}パーフェクトと^よ呼ばれる。

2.4 ^{あらわ}アスペクトを表^{ほか}す^{けいしき}その他の形式

日本語では、^{にほんご}事態の^{じたい}展開の^{てんかい}各^{かく}フェーズを^さ指す^{けいしき}アスペクト形式として、^{どうし}動詞の^{れんようけい}連用形^{けい}または^くテ形と^あ組み合わせた^{けいしき}形式がある。

^{れんようけい}連用形に^{せつぞく}接続し、^{ふくごうどうし}複合動詞となる^{けいしき}形式としては、「^かかける」「^{だす}だす」「^{はじめ}始める」「^{つづ}つづける」「^おおわる」という^{じかんてき}時間的な^{てんかい}展開を表^{あらわ}すもの（例えば、「^た書き^かかける」^{かいし}（開始以前・^み未完^{ぜん}遂）、「^か書き^{はじ}始める」「^か書き^だだす」（開始）、「^か書き^{つづ}続ける」（^{けいぞく}継続）、「^か書き^お終わる」（^{かんりょう}完了））がある。

また、「^いいる」と同じように^{おな}動詞の^{どうし}テ形に^{けい}接続する^{せつぞく}補助動詞としては、「^あある」（^{けっかじょうたい}結果状態）、「^おおく」（^{けっか}結果の^い維持）、「^くくる」「^いいく」（^{へんか}変化の^{しんてん}進展）、「^{しま}しまう」（^{かんすい}完遂）などがある。

2.4.1 ^{けい}テアル形

^{ほじょどうし}補助動詞「^あある」からなる^{どうし}動詞の^{けい}テアル形は、^{けっかじょうたい}結果状態を表^{あらわ}す。その点では、^{ほじょどうし}補助動詞「^いいる」で^{けいせい}形成される^{けい}テイル形と^に似ているが、^{けい}テイル形が^{あらわ}表す^{けっかじょうたい}結果状態と^{ちが}違

い、その動作が何らかの目的のために行われたというニュアンスを持つ。自動詞「閉まる」のテイル形の例 (15.) は、単に門が閉まった後の状態を表しているが、他動詞「閉める」のテアル形の例 (16.) は、誰かが目的をもって門を閉め、その結果、門が閉まっている状態にあることを表している。この場合、状態の主体は、「門が」のようにガ格になることが多いが、「門を」のようにヲ格のままでも現れることもある。

(15.) 門が閉まっている。(自動詞テイル形：結果状態)

(16.) 門が・を閉めてある。(他動詞テアル形：結果状態)

2.4.2 テオク形

補助動詞「おく」を用いたテオク形は、他動詞についてその動作の結果を維持することを表す。この点では、テアル形と似ているが、テアル形が目的をもって行われた動作の結果状態を表すのに対して、(17.) のようなテオク形は、「開かないように閉まった状態を維持する」ということに意味の重点がある。

(17.) 太郎は門を閉めておいた。

けい なに もくてき も じぜん どうさ おこな い み あらわ うえ
 テオク形は何かの目的を持って事前^{じぜん}にその動作^{どうさ}を行^{おこな}うという意味^{い み}を表^{あらわ}すので、上^{うえ}

れい なに もくてき もん し じゅんび い み かいしゃく
 の例^{れい}も何かの目的^{ねん}のために門^{もん}を閉^しめた、という準備^{じゅんび}の意味^{い み}に解釈^{かいしゃく}できる。

2.4.3 テクル・テイク形^{けい}

「くる」「いく」は、前の動詞^{まへ どうし}が表^{あらわ}す事態^{じたい}や出来事^{できごと}に関する変化^{かん}が進展^{へんか}することを
 あらわ りょうしゃ ちが してん へんかまへ へんかご お こと
 表^{あらわ}す。両者^{りょうしゃ}の違い^{ちが}は、視点^{してん}を変化前^{へんかまへ}と変化後^{へんかご}のどちら^おに置く^{こと}かが異なる^{こと}。(18.) では
 あか へんか はじ あと してん さむ へんか お はじ まえ
 明る^{あか}くなる変化^{へんか}が始^{はじ}まった後^{あと}に視点^{してん}があり、(19.) では寒^{さむ}くなる変化^{へんか}が起こ^おり始める^{はじ}前^{まえ}
 してん
 に視点^{してん}がある。

(18.) だんだん空^{ぞら}が明る^{あか}くなってきた。

(19.) これから^{さむ}はどんどん寒^いくなって行^いきます。

2.4.4 テシマウ形^{けい}

「しまう」はテ形動詞^{けいどうし}についてその動作^{どうさ}が最後^{さいご}まで終^おわることを強^{きょうちよう}調^{たど}する。例^{たど}え
 しゅくだい お い み じゅうてん
 ば(20.) では、宿題^{しゅくだい}を終^おえるということ^{い み}に意味^{い み}の重点^{じゅうてん}がある。

(20.) ゲームをする前^{まへ}に、宿題^{しゅくだい}をしてしま^{しゅくだい}いなさい。

3. テンス

テンス（または、時制）とは、基本的に発話時を基準にどの時間点を指し示すのかを区別する文法カテゴリである。現在・過去・未来といった時間的区別がある。日本語では、テンスは形容詞や動詞に表れる。

3.1 形容詞のテンス

イ形容詞は「赤い」のようなイで終わる形が現在を、「赤かった」のようなカッタで終わる形が過去を表す。話し言葉では「赤いでした」のようにデシタをつけた形も可能である。ナ形容詞は「元気だ・です」のようなダ・デスで終わる形が現在を、「元気だった・でした」のようにダッタ・デシタで終わる形が過去を表す。この形は、名詞述語文のコピュラ「だ・です」についても当てはまる。発話時より後の未来の状態も基本的には (21.) のように現在を表す形で表現できるが、この場合は、話者
 がその状態について高い確信度を持っている。そうでない場合は、(22.) のように「だろう・でしょう」のような推測を表す言葉をつける。

(21.) 昨日も暑かった。今日も暑い。きっと明日も暑いよ。

(22.) 今日は暖かかったけど、明日は寒いでしょう。

また、イ形容詞やナ形容詞で状態の変化を表す場合は、(23.) の「寒くなる」や

(24.) 「元気になる」のように、イ形容詞ではク形に、ナ形容詞ではニ形に変化を表す動詞「なる」をつけて表す。

(23.) 今きょうも寒さむいけど、明あした日はもさむっと寒くなる。

(24.) 今いまは病びょう気きだけだけど、すさぐぐに元げん気きになるよ。

3.2 動詞のテンス

動詞の場合、辞書形と同じル形と「た」で終わるタ形により、文法的なテンスが区別される。日本語のテンスは、基本的に過去・非過去の対立である。主節において、ル形は現在または未来の状態や出来事を表し、どちらになるかは動詞の種類によって異なる。また、タ形は主節では過去の出来事を表す。しかし、従属節においては、ル形とタ形が必ずしも非過去と過去を表すとは限らない。

3.3 主節のテンス

動詞のル形が現在として解釈されるか、未来として解釈されるかは、動詞の種類が関係している。「ある」「いる」「できる」のような状態動詞のル形は、発話時の

じょうたい あらわ たい よ く どうさどうし けい みらい どうさ
状態を表す。それに対して、「読む」「来る」などの動作動詞のル形は、未来の動作
あらわ
を表す。

やね ねこ
(25.) こっちの屋根に猫がいるよ。

やね ねこ く
(26.) こっちの屋根に猫が来るよ。

ねこ はつわじてん ねこ そんない じょうたい あらわ
(25.) の「猫がいる」は、発話時点において、猫が存在する状態を表している。そ

たい く はつわじてん じつげん まえ どうさ あらわ ねこ く
れに対して (26.) の「来る」は発話時点において実現する前の動作を表し、「猫が来る」

はつわじ あと じてん お あらわ
は、発話時より後の時点で起こることを表している。

けい ぶんみやく しゅうかんてき い み かいしゃく
(27.) のように、ル形は文脈により習慣的な意味で解釈することができる。

まいにち やね ねこ く
(27.) 毎日屋根に猫が来る。

けい じょうたいどうし か こ じょうたい けい どうさどうし か こ どうさ あらわ
タ形の状態動詞は過去の状態、タ形の動作動詞は過去の動作を表す。

きのう やね ねこ じょうたいどうし
(28.) 昨日屋根に猫がいた。(状態動詞)

きのう やね ねこ き どうさどうし
(29.) 昨日屋根に猫が来た。(動作動詞)

けい どうさどうし はつわじ はっけん あらわ
 タ形の動作動詞は、(30.)のように発話時における発見を表すこともできる。

(30.) あっ、ここにあった。(ものを探していて発見したとき。)
 さが はっけん

また、状態述語のタ形は(31.)のように話し手と聞き手の共有知識の確認に使うこともある。
 じょうたいじゆつご けい はな て き て きょうゆうちしき かくにん つか

(31.) 今日は3時から会議でしたよね。
 きょう じ かいぎ

次の例では、すぐに帰るように強く命令している。ただし、丁寧形の「ました」はこの意味で使うことはできない。
 つぎ れい かえ つよ めいれい ていねいけい
 い み つか

(32.) さあ、さっさと帰った、帰った。
 かえ かえ

3.4 従属節のテンス

じゅうぞくせつ あらわ どうし けいしき つか ばあい
 従属節に現れる動詞については、(i) 2つのテンス形式のどちらも使える場合、(ii) どちらか一方しか使えない場合、(iii) どちらも使えない場合がある。例えば、理由節
 いっぽう つか ばあい つか ばあい たど りゆうせつ
 「ので」は、どちらの形式でも使うことができる。(i)の場合、テンス的な意味の対立
 けいしき つか ばあい てき い み たいりつ

が認められ、(ii) と (iii) にはテンス的意味の対立がない。(ル形とタ形とでは意味が異なるが、その違いは後で説明する)。

(33.) 昨日は友達が {来る・来た} ので、部屋にいた。

また、条件節の「と」はル形のみ、時間節の「後」は、タ形しか使えない。

(34.) 食べ放題へ {行く・*行った} と、いつも食べ過ぎてしまう。

(35.) ご飯を {*食べる・食べた} 後、お風呂に入った。

さらに、同時性を表す「ながら」では、テンス形式を用いることはできない。

(36.) 本を {読み・*読む・*読んだ} ながら、おやつを食べた。

従属節においてテンスの対立が認められる場合、基準時が発話時である場合と、主節のテンスを基準時とする場合とがある。逆接を表す「けれど」は、発話時が基準となる。次の例の「言う」は、発話時点ではまだ行われておらず、それより後の動作を指す。

(37.) そのことは、姉には言うけど、母には言わないでおいた。

うち かんけい あらわ れんたいしゅうしょくせつ じかん あらわ せつ りゆう あらわ
 内の関係を表す連体修飾節や時間を表す「とき」節や理由を表す「ので」「か
 ら」節の場合は、主節のテンスが基準時となる。このようなテンスを相対テンスと呼ぶ
 ことがある。動詞にもよるが、ル形は主節の出来事と同時にまたはそれよりも時間的に前
 の時間点を指し、タ形は主節の出来事よりも後の時間点を指す。(38.) のル形「洗濯す
 る」は、「入れられた」という過去の動作よりも後に起こる事態を表す。一方、タ形
 「洗濯した」は「入れられた」という過去の事態よりもさらに前に起こった事態を表
 している。

(38.) {洗濯する・洗濯した}ものがビニール袋の中に入れられていた。

おな りゆうせつ じかん あらわ せつ い
 同じようなことが (33.) の理由節や時間を表す「とき」節にも言える。(33.) では、
 く へ や まえ き へ や すく
 「来る」だと部屋にいたのはその前からとなり、「来た」だと部屋にいたのは少なくとも
 どうじ いこう あ どうさ すべ ころ
 もそれと同時にそれ以降になる。(39.) では、「開ける」だと、その動作が「滑って転
 ぶ」動作よりも前に起こったことを表すのに対して「開けた」では、「滑って転ぶ」
 どうさ どうじ あと お あらわ
 という動作と同時にそれよりも後に起こったことを表す。

(39.) 門を {開ける・開けた} とき, 滑って転んだ。

キーワード:

アスペクト テンス 状態動詞 動作動詞 継続動詞 瞬間動詞 一回動詞 完成相

継続相 動作継続 結果状態 パーフェクト 相対テンス 補助動詞 従属節

はつわじてん
 発話時点

